

## デューイの自然主義的形而上学

特に第二章から第四章を中心として

(無所属)長谷瑞光

本発表ではデューイの『経験と自然』(一九二五年)の前半部分、とりわけ第一章から第四章までの議論を注解的な資料を配りつつ、要点を纏めたい。南イリノイ大学の全集版の解説で、デューイの高弟フックが、「難しい」と表現しているように、この著作は極めて解りにくい。実際、この著作には、個々の章立てとタイトル、そして構成にも若干の混乱が見受けられるようにさえ思われる。未完の書物ではないとはいえ、秩序立てて論述されているとはいいいく箇所が出てくるのは確かである。もっともこれは、構成上の問題以上に、ここで扱われる問題自体の複雑なことにも拠るだろう。おそらくデューイの構想が巨大すぎたのだろう。

さてその第一版に対して、サンタヤーナは「自然主義的形而上学」なる定義は形容矛盾であるという趣旨の批評論文を書いたが、自然主義的形而上学に該当する表現の論述は、特に第二章に登場する。そして特にこの本の第二章から第四章までの章は、基になったケーラス講義の題目と比較して察するに、最初に講義された部分であろう。ここには「質」(quality, qualities)、目的(ends)、知識(knowledge)、手段(means)のようなデューイ研究者には馴染みの言葉と共に、物事(things res)、歴史(histories)などを始め、ちょっと読んだだけでは解りにくいデューイ独自の意味を持った言葉が出てくる。

第二版(一九二九年)では、第一章のみが、ほぼ全面的に書き換えられ、旧版にあったペリーへの冒頭の言及が第二版では消え、代わりに文章中にアインシュタイン等の物理学者の名前などが登場する。新版には旧版から流用された部分も含むが、旧版でペリーの名と共に仄めかされている、デューイが全面的にではないにせよ関わってきた、新実在論や批判的実在論と、観念論との論争の存在を見えにくくさせてしまった。勿論、その残滓は第五章の ego-centric という、ペリーがデューイ批判に使った表現を、デューイが鶏の餌への反応の例に使い、人間のコミュニケーションとわけているところには残っている。

『経験と自然』第一章は全体の導入部分であり、さらにもっといってしまえば、人間存在という立場からいわば人間経験から存在一般の『認識』について語っているところである。ここでは基本的に人間の日常経験と、科学的知見を踏まえた反省的経験との循環的なあり方が語られる。アインシュタインの名前に象徴される物理学の例や、博物館での人間登場以前の、つまりは人間の経験が生まれる以前の地球の状態の科学的理解の例などは、それ以前の『新実在論』、批判的実在論と観念論との論争を、新たに存在論的地平線から問い直そうとしているようにも思われる。

続く第二章でデューイは現代ではこの世界において存在の不安定性というものがしばしば軽視されており、それは安定性とのセットで語られなければならないとする。デューイは指摘する。世界は二極的であった。疫病、作物の飢饉、病気、死、戦争の敗北、これらが、いつも身近にある一方、強韌さ、勝利、祭礼と歌もまたあった。運とは文字通り、善と悪の配分であった。聖なるものと呪われたものは、同じ状況の可能態であり、そして聖なるものと呪われたものを具体化していないカテゴリーはなにもなかった。人々や言葉、時間、空間における方向、石、風、動物、星々など、これらは皆、そうしたカテゴリーであった。人は、不安で恐れ多い世界に存在しているがゆえに、心配に満ちている。世界は不安定で危険なものである。世界とは、この事実簡単にアクセスできるものとしてあり、原始的な経験から引用されてきたこの事実の著しい証拠なのである (LW1: vol.1.p.44)

したがってもし我々が古典的な用語法にしたがうならば、哲学は智慧の愛 (love of wisdom) であり、しかるに一方、形而上学は存在の一

般的特徴についての認識である。この意味において形而上学に関しては、不完全性と不安定性は、終局的かつ固定されたものと同じジャンクの足取りに与えられなければならない特徴である (LWvol.1.p.50)

続く第三章で、デューイは自然とは、目的と歴史とによって構成されているものと示唆した。目的(ends)は、前章の不安定なものと安定したものに関連している。なぜなら目的は一つの必然法則ではなく、複数の目的(ends)という可変的なものだからである。すなわち、目的は、ends という複数であると同時に、「終わり」を意味することもあるであろう。歴史の中で複数の「目的=終わり」が連続と続いていく。ここではどこかに「始まり」も前提されている。そしてここでの表題の一つである歴史も複数の個人や文明の歴史的な栄枯衰亡をも示唆していよう。しかし次のことが忘れられてはならない。デューイは、自然的目的(natural ends)という出来事が、最初から絶対的に決められた始まりと終わりを持っているという発想そのものには疑問を投げかけている点だ。

そしてもう一つ重要な点がある。この章で示唆しているのは、必ずしも自己認識的な目的 ends だけというわけではないということである。それは因果性の問題だったり、物理学的な観測の問題だったりする。デューイはこうした科学的な観測上の物事に、Res, Affair, res, thing などの表現を与えている。いわば物理的に他なるものは、観測された出来事であり、当時最新の物理学が示したように、「その題材(its subject-matter)は、物事(thing, res)の慣用的な意味で、太陽系であれ、他の恒星系であれ、あるいは原子であれ、多様化され、多かれ少なかれ、緩やかな出来事の相互結合であり、近似的に跡づけられる十分、明確な境界に至っている」(LW.vol.1.p.85)。

他方、この章でもう一つ挙げられている存在の事態は、「直接性」とか「質」(qualities)というものの存在である。私の理解する限り、質は自然に内在するものを経験が直接的に捉えるものであり、結局、デューイ的な意味での概念であり、このような質は伝統的な神学的哲学的概念とは異なった「実体」(substance)概念に関わってくる。

「したがって光も水も、実体である一方、虹は、光と蒸気が高度に特別化された結びつきに依存し、推移的であるが故に、ただの一つの「現象」(phenomena)である。それゆえこの現象ははかないものである」(LW.vol.1.p.95)。そして赤や青、甘い、酸っぱいなどは、虹より、より現象的なものである (ibid)。

第四章「自然、手段、知識」でデューイは、前の章の最後に出てきた自然界から人間が補足する「質」と、科学的世界観の乖離について語る。両章は角度を変えて近接したテーマを扱っているのだ。

「さて本来はあらゆる自然現象は、質という観点から、知らされなければならない。熱いも冷たいも、湿っているも乾いているも、上がるも下がるも、重いも軽いも、これら皆、まさにそのことによって質から知られるべきものだった。ところがガリレオとその追従者(デカルトやホブブスも含む)は、上記のような人間の知覚を含む質を取り扱うことを不可能と考えたのである。知識が投げ所とすべき領域は、空間的諸関係、位置、質量、数学的に定義されたもの方向や重力を持つ空間の変化としての運動におけるものであり、感覚知覚によって捉えられる自然的質ではなかった」(LW.vol.1.p.108)。

第二章から第四章は密接に関連している。これらは第五章のコミュニケーションを扱った章や、第六章以下、第十章までの人間の心の存在と身心問題、意識、そして芸術、価値の問題を扱った章に比べると、より形而上学的な存在一般の問題を扱おうとする姿勢が明瞭であり、そのことからしても非常に難解である。報告では内容に沿った注解的な資料を配付し、口頭では問題点を抽出したい。

かか